



妙たえの光ひかり

通刊32 復刊7号
1992年12月20日(季刊)
角田山妙光寺 発行
新潟県西蒲原郡巻町
角田浜
〒953 ☎0256-77-2025

梵鐘

現在の梵鐘は日蓮聖人七百遠忌記念事業の一つとして、皆さんの浄財で新鑄され、昭和五十一年十月先代住職の三回忌法要にあわせて開眼除幕、撞初めされた。外径三尺、重量二百六十貫(約一トン)と大きい方。音も重厚で、心落ちつかせる響きがある。脇には篆書の第一人者、野村耀昌立正大学仏教学部教授の書で、妙光寺の歴史と梵鐘鑄造に至る経緯が記されている。

前の梵鐘は一七七〇年頃、三十三世日耀上人の代に鑄造され、外径二尺八寸との記録がある。昭和十八年十月、先代五十二世日陽上人の代に第二次大戦激化の中で供出させられた。「あのとき俺が、国のためとは言え鐘までと思いつながら巻の駅まで馬車で運んだんだ」と語る人が現存している。三十三年ぶりに、主のなかった鐘楼堂に復活した。

いつもは行事のときしか撞かないが、大晦日の夜は主人公となる。復活以来毎年、灯光器で照らされた境内に百数十人が列を作って撞く順を待つ。家族連れから若いカップルまで、檀家に限らず遠くは燕や新発田から。お焚き上げの火にスルメを焼く組、クジ引きに当たったと喚声を上げる若いグループなど、静寂の中のしばしのざわめきが鐘の音とともに山に響く。

年 末 雑 感

小 川 英 爾

妙光寺の門戸はいつも開いている。強風で玄関の戸を閉める日はあっても、夜間も鍵をかけることはない。お参りは誰でもいつでも自由にできるようにしている。これは日蓮聖人の靈蹟として、昔から全国各地より信者が個人や団体で日々訪ねて来られることによる。近年観光客の拝観が急増し、トイレ休憩や単なる観光目的のこれらの人達には迷惑することが多い。それでも一々選別して対応する訳にもいかず、玄関には「参拝はご自由にどうぞ」と掲示してある。そのせいかどうかさまざまな来客があつて、時折りあわてさせられることがある。

朝早く声をかけてきたある男性、「県外から婿に来たがうまくいかないのを死を覚悟して出て来た。最後に坊さんに話を聞いてもらいたいのだが……」と言う。結局昼過ぎまでつき合つて話を聞いて、どうにか思いとどまつてもらつた。商売の失敗、人間関係、夫婦の問題等を機に思いつめて飛び込んで来る人が年に二人や三人はいる。ほとんどが初対面。夜中夫婦喧嘩のあげくに寺に逃げてきて、二、三日滞在した人もいる。今は本人と笑い話になっているが。残念な結末を迎えたことも幾度かある。妙光寺が大好きという出入りのペンキ屋さん。まだ若いのだが大病の末、仕事はもちろん外出も車の運転も禁じられているのに通つてきては寺で過ごす日々、とうとう七月の晴れた日の午後、木陰で昼寝の姿で亡くなつてしまつた。これは三年程前の話なのだが、先日葬儀を依頼されたある初対面の方に、「私どもが頼りにしていたペンキ屋さんが大好きで通つていた巻町のお寺とはこちらのこと？」と尋ねられ、その偶然に相方で驚いた次第。

近頃裏の岩屋が水子供養の所と広まつたらしく、お経をあげて欲しいと訪ねて来る若い女の子が増えた。中には十五、六歳と思われる子もいて、都合がつく限り本堂で一緒にお勤めし、その後「自分自身の心と体を大切にしながら、供養する心を忘れなければ、障り、たたりなど心配することはない」と話す。皆大粒の涙を流して帰っていく。

夫婦で突然訪ねて来た中年の二人、未婚の娘が妊娠したためどうしたかというのかとの相談であった。すっかり精神的に落ち込んだ二人の姿は痛々しい程。「お話に心がおちつきました」と帰られた一週間後、その娘さんと三人、粉ミルクなどのお供え物を抱えて来たので、戒名をつけてご回向えこうしてさし上げた。当の娘さんも大きな涙を流していた。親娘三人でこれまでのこと、これからどう考えていったらいいのか、じっくりと話し合ったとのこと。この親娘の真摯な態度に心打たれた。お経の後心和らいだ三人との会話の中で「昨年の九州旅行の際、観光したキリスト教会では入口が開いて自由に中に入れたし、受け入れてくれる雰囲気があった。お寺はそうでないところがほとんどの中で、こちらの入りやすさがぶしつけなお願いをすることになって…」と語ってくれた。

夫婦間の相談事や病気の苦しみからの相談で、手に負えず親しくしている医師や弁護士に応援を求めることもある。

暗い話ばかりではない。不在がちな私を何度も訪ねて来て相談したいと言った女子学生。会ったら人気女優宮沢りえ似の美人、その悩みが学校の先生を好きになったがどうすればいいのかとくたくたなく話す。連れだった友達二人も混じえて人生論となった。なぜ私にと問えば、「その好きになった先生がお坊さんの話は聞く価値があると言われ、このお寺のお坊さんならいいかなと思っただ」と。妙光寺には人を寄せる引力があるらしい。

先代住職のときよりユース・ホステルとして旅する若者に宿泊を供してきた。ここでも数多くの出会いがある。二月の雪の日の夕方、檀家の夫婦が小柄で若い外人女性を乗せて来た。息子が以前自転車で日本一周して見知らぬ人達に世話になった。だから仕事の帰り駅で困った風になっていたこの人に声をかけたたら、うちの寺に行きたいと言うので連れてきたとのこと。ヨルダン人でスチュワーデスをしており、一人で日本旅行中とか。寒さの中でほとんど心細かったのか、大きな目に安堵の色がありありしている。ありあわせの夕食の後、我が家の娘四人とともに持参の紅茶を飲み、片言の英語だけでビーズ玉で遊んで打ちとけていた。以後しばしば、かの地の紅茶が送り届けられる。

開かれた心うちとける寺でありたいといつも念じている。これが妙光寺の伝統であり、多くの人に接することで私自身も学ばせてもらっている。先に書いた親娘三人のご主人が帰り際に「お寺っていいですね。私ら人と接するのは仕事上のつき合いばかりで頭もそっちらか向かないが、仏さまのもとでは心開いて素直な気持ちになれる」と言ってくれた。

総代の夫を支えて六十五年

故 大滝 ソヨさん(86)

五十年余りにわたって妙光寺の檀家総代を務め、去る平成二年三月に亡くなられた角田浜の大滝金吾さん。その夫人のソヨさんが十月八日亡くなられた。晩年は病気の金吾さんにつきっきりで、亡き後は一周忌、三回忌と務める中、大滝家の墓の山からの移転、妙光寺への参道石橋寄進を中心になって進め、完成後毎日のように墓参りと、境内への散歩が日課だった。

家にあつては朝晩の勤行を欠かさず、一家の中心となりつつある孫夫婦にお経を伝え、外では入退院をくり返すようになるまで、地元角田講中の中心として皆をリードしてきた。

大滝家に生れたソヨさんは十八で金吾さんを婿に迎え二女をもうけるが、二十歳を過ぎて発病、当時新潟市内の

大きな病院で不治の病と宣告され、苦しみの日々が続く。医学がだめなら信仰で治そうと、金吾さんの応援を得て、厳しい寒中白装束で井戸水をかぶる水行を何年か続けるなど必死の日々。奇跡的に病気の回復をみるや、喜んで二人は身延山、七面山へ御礼に参拝、帰路白装束に白ハチ巻の姿で横須賀の親戚に寄って驚かれたと、語り残されている。

以来これまでも増して一家の中心は日蓮聖人と妙光寺となり、ソヨさんは仲間を増やして信仰に励んだ。金吾さんは妙光寺檀家総代として、その運営、行事に率先して陣頭指揮をとり、現任職の代となつてからも、梵鐘再建、客殿工事、水害対策を乗り切ってきた。日蓮聖人七百遠忌の年には、七十五歳

の体をおして現任職とともにインド仏蹟参拝にも足を伸ばし、他のお寺から妙光寺に大滝さんありと言われた。

ソヨさんは信仰熱心と同時に、村一番の唄い手として名をはせた人気者。盛りの頃には角田甚句に始まっていくつかの盆唄を、ハリのある美声と即興の歌詞で集った人達を沸かせたという。今年の秋の村祭りにはソヨさんの唄がテープで流れる中、村の通りを踊りの列が続いた。

親しまれたソヨさんが亡くなって二カ月余りたつ今も、遺骨を飾る祭段の前で、曾孫までの一家七人が毎夜集つて寝ているという。



和やかな身延、七面山団参

隔年で実施している総本山身延山久遠寺への団体参拝旅行を、十月五日〜八日に三泊四日で行いました。いつもは大型バス一台ちよほどの人数になるのですが、今回は二十五名と少なめ。

一日目上越新幹線と東海道新幹線を乗り継いで新富士駅からバスで身延山へ。二時前には到着して早速岩間日勇法主様に特別のご面会、後広い堂内をゆっくり参拝して宿舎の北之坊へ。あいにく冷たい雨で、明日の天気案じながら早々に就寝。

二日目は五時半起床、白み始めたとはいえ満天の星空のもと、本山の朝のお勤めへ。あきらめていただけに思いがけずすばらしい晴天に恵まれ、足取りも軽く二千メートル、平均四時間の七面山登詣。四時頃には全員無事到着

して元気な人は奥の院まで足を伸ばした。文字通り一汁一菜の夕食の後、しんと冷え込む本堂で夜の勤め。九時前には七面山名物の長巻き布団に、全員が肩寄せ合って就寝となる。

三日目、期待通りの雲一つない御来光、手が届きそうな目の前の富士山から登る朝日に一同感激。朝勤、朝食後下山開始、予定通り昼前には無事登山口の茶屋に着き、登らず寺院巡りをした組と合流する。服を着替え、午後は静岡市内のお万の方様ゆかりの蓮永寺様を参拝、夕刻浜名湖のほとり館山寺温泉到着。浜名湖の夕景を眺めながらの温泉は格別。カラオケも入って懇親の夕べは賑やかに盛り上った。

四日目は朝から観光、浜名湖を巡って豊川稲荷へ。昼頃から降り出した雨

に、参拝時の晴天を喜び合った。豊橋から新幹線乗り継ぎで夕刻新潟到着。和やかで、ありがたい参拝の旅だったと口々に家路に着いた。

身延山への参拝旅行は一年おきに実施しています。他に佐渡が島を希望される声があり、ありますが、これまで二回行っていません。何回でもという声があれば計画します。



遅ればせながらのご報告

時間が経過してしまい恐縮ですが、夏フェスティバル安穩のご報告を。

三回目ということで地域にも定着した感じで、地元の方々が多く、法要に百五十人、講演会に百人以上の参加者がありました。ことに地元紙の新潟日報が、住職の書いた原稿始め、社説、そして紹介記事で何度も取り上げ、これまで今一つだった県内の反響がぐっと変化した感じですよ。

当日は天候にも恵まれ、地元の太鼓グループと日蓮宗の研修中の若手僧侶十二名による法要に、涙が出る程感動したと幾人かの方から言われました。泊まり込みの参加は三十五名と少なめでしたが、懇親パーティーは七十名余りでもと和やかでした。都合で今年参加できないがせめてローソクだけでもと、計八十本の奉納をいただき、

事務局は大助かりでした。

来年の第四回は太鼓グループをもう一度という声が多く、さらに地元の琴の教室から、二十名で琴の演奏を加えさせて欲しいとの申し出をいただいています。当日の運営にも協力したいという会員の方もおいですので、春三月に企画運営のための会合を、皆さんに集っていただいて開こうかと考えています。住職の講演を聞いた各地の方からも、参加したいので日取りだけでも早目にと言われています。ちなみに来年は八月二十八、九日の予定です。県内からの問い合わせ、申し込みが増え、第二基目に着工いたしました。現在十五件の予約申し込みを受け、その方達には区画を決めて予約金をいただき、来夏七月の完成時に残金をお願いする形で進めています。



夏にお願いしている会費の三千五百円ですが、こちらの手違いで振替用紙を入れ忘れた方が何人かありました。その方も含め、平成三年度分が未納の方々に今回振替用紙を同封いたしましたので、年明けでけっこうです、郵便局からご送金下さい。入金済の方には必ず受領証をお送りしています。ご不明の点のある方は恐縮ですがご連絡下さい。

寺庭から

今年もおせわになりました

今年ももう終わります。今夜は境内

の松の木が折れそうなほどの風が吹いています。雷の音、海鳴り、冬の始まりはいつも恐ろしい感じです。実際これからお正月までの準備の段取りを考えただけでもゾゾーなのです。でも大晦日の二年参りから始まるお正月行事は気分も新たに私は大好きです。

妙光寺に嫁いでまる九年、私のおもな仕事はお寺にいらっしやる方の接待と留守番です。全部の檀家の方を覚えてはいないと思いますが、それでも玄関に見えた時わかる方のほうが多くありませんでした。大晦日の晩は私が受付に座ります。普段お目にかかれないようなご家族を伴ってのお参りを楽しみにしていますので是非声をかけてください

いね。

この秋大好きだった方がお亡くなりになりました。結婚してお寺の生活に慣れずにとても辛かった頃、お寺参りに来るたびに「元気にしているかね」「子供はどうしたね」とお土産を下していました。さりげない言葉と笑顔に温かさがにじみでていて、本当に元気が出てくるような気がしました。優しいということはずいことです。生きることに力を与えてくれる、そんな感じます。その方のご家族にはもっともつと優しい宝物を残していかれたのでしよう。

たくさんの人との出会いがある分、別れもある。お寺での別れはあっちの世界に行ってしまうことなので本当に

つらい。だんだんつらいお葬式が増えてきて、正直なところまいりました。

でもあることに気付きました。「誰でも死ぬ」という事実です。死にたくないですけどね。私だって明日はわかりません。その時は「じゃ、お先に」のノリで死にたいなと思います。そのためにはありきたりですが、毎日を大切に生きて、贅沢をいうなら先の方のように残った家族が元気のであるような宝を少し残せれば……それだけです。

平成四年、皆様お世話になりました。また来年もよろしく願いました。除夜の鐘ではコンニャクを煮てお待ちしています。ではまた。

(小川 なぎさ)



行事案内

お札配りの遅れ

例年十二月に入りますと全檀家一軒ずつ、来年のお札を配りながら暮れのお経に参っております。今年は九月以降ずっと忙しく、ことに十一月は法事、葬儀が重なって続き、その上講演等で県外出張も数回に及びました。そのためお札作りがでぎずに十二月に入ってしまった、さらに風邪で寝込む日もあって予定が大幅に遅れています。この先正月準備もあり、葬儀が入ったりしますと、年内に全部は回りきれないと思われます。伺えなかったお宅は年明け七日過ぎから回りますのでご了承ください。いかんせん全て一人ですのご理解の程を。

除夜の鐘

大晦日の夜十時半より本堂で除夜法要、引き続き十一時四十分頃より除夜の鐘を撞きます。一ページに書きましたように、どなたでも先着順に一回ずつ撞いていただきます。記念品や抽選による縁起物の景品もありますが、毎年少しずつ出足が早くなっていますので、十二時前にお出かけ下さい。

今年境内の様相が変わっています。車は駐車場をご利用の上、灯光器の明りに従って足元気をつけてご参拝下さい。

元旦年始受け

元旦朝より午後にかけて年始受けをしております。お寺参りはお盆だけでなく、正月と彼岸の年四回は少なくとも心がけたいものです。

編集後記

九月発行予定の七号が今になってしまい申し訳ありません。先にも書きましたが、七月からずっと時間が取れず、十二月に入って風邪の体を休ませながらどうにかまとめました。どうか年内にお届けできそうなのでホッとします。

本当に十一月の多忙さは尋常でなく、これは葬儀が多かったせいですが、一般的な傾向とか。その分お寺は景気がいいと言った口の悪い人がいますが、冗談半分とは言え正直なところいい気はしません。田舎の寺の運営は見えないところに苦労が多いんです。

どうぞ元気で良い年をお迎え下さい。

(小川 記)

